

(別紙 2)

審査の結果の要旨

氏名 栗原 成郎

諺はロシアの口承文芸のうちでも最も豊かに発達し、最も広く普及しているジャンルの一つとされる。古くは 17 世紀から種々の俚諺集の刊行が行われるなど、ロシア本国では主に諺の記録、収集、分類という形での「俚諺学」(paroeimiography) 研究が進められてきた。しかし諺の言語表現面に関しては、18 世紀以降に西欧諸語の影響下に成立した近代ロシア標準文語の文法では律することのできない民衆語の文法構造が強固に保たれているという理由などから、研究が立ち後れていた。本論文は未開拓の分野を多く残すこうした「俚諺論」(paroeimology) 研究のうち、俚諺表現の統語論の解明に意欲的に取り組んでいる。

まず序論においてはロシア語の俚諺の外的形式の安定性(異同の少なさ)が、韻律組織と統語関係によってもたらされることが数多くの諺の例とともに説かれる。また従来行われていた「諺」と「諺風成句」という俚諺表現の名称の形式的、内容的区別の有効性の吟味と研究対象の確定がなされている。次いで本論は諺の文形式の分類に基づく体系的記述に替わり、第 1 章では主語と述語を備えた文形式を持つ諺が取り上げられる。「主語となりうる語形・語群」、「主述一致文」「主述不一致文」における述語の種類が、それぞれ網羅的に、標準語の文法規範から逸脱するものに至るまで豊富に挙げられている。第 2 章では形態上の主語を欠く「単肢文」というロシア語特有の文形式を持つ諺が取り上げられる。この形式は「普遍妥当性の言語表現」である諺では数多く見られるが、動詞の人称変化形、命令形、不定形等の、諺に現れるすべての語形が分類・記述され、それら語形間での交代の実現という現象の意味も考察される。第 3 章ではロシア語の諺の約半数を占める並立複合文が取り上げられ、ここに現れるすべての等位接続詞別に、複合文の 2 項間の意味構造が詳細に分析される。続く第 4 章では従属複合文が取り上げられ、前章同様、従位接続詞別の丹念な分類・記述がなされるが、ここで注目すべきは接続詞 что に見られる民衆語特有の数々の用法の指摘である。文形式による記述の最後となる第 5 章では接続詞欠如複合文が扱われる。2 項の文の間の意味関係を接続詞や関係詞を用いずに表現するこの形式は、ロシア語の俚諺表現には数多く見いだされるが、そうした意味関係がそれぞれの文の述語の形態と関連しているという卓抜な指摘がある。最終第 6 章では、ロシア語の諺において修辞法と統語法が不可分の関係にあることを考慮し、17 種に上る修辞的表現と統語法との関連が論じられる。特に諺に多く見られる直喩の形式についての記述は詳細を究める。

本論文は周到な準備の下に膨大な数に上るロシア語俚諺表現を文法的に精査し、得られた貴重な数々の結論をできる限り簡潔に、体系的に、しかし網羅的に記述した労作である。薄い外見とは逆に内容は濃い。述語の形態や接続詞の分類に基づく記述を主軸としているため、第 4 章では関係詞を用いた文形式の記述がなされていないなどの若干の遺漏があるが、論文の価値を損なうものではない。併せて提出された参考論文「スラヴのことわざ」も、ほとんどすべてのスラヴ諸語に材料を求めた諺注解の学識豊かな試みであり、両論文は今後、スラヴ語圏の俚諺表現を読み解く際の必須文献になると思われる。

以上により、本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位授与に値するものとの結論に達した。